

大藏流 古狂言 虎明本における漢語形容動詞連体形の一用法

「ゝナ」「ゝナル」と「ゝノ」

佐々木 峻

はじめに

大藏流古狂言の台本たる虎明本（寛永十九年八一六四二V写）は、本邦中世の口語をうつしたものと見て、国語史研究上、有力な資料とせられる。特に、対話文表現を豊富に含むという点では同期の他文献に比して、独自の性格を有するものである。（例えば、多種多様な文末詞を含むなど）

本文献の言語が、極めて口語的である（時には卑俗ですらある）ことは、多々認められるところであるが、その一として、形容動詞連体形での「ゝナ」形を指摘することができよう。

筆者は、虎明本に見られる漢語について、かねてより深い関心を寄せ、その一端をいくらか発表してききた。殊に、漢語の形容動詞的用法に関して考察を進めた結果、その連体法において、「ゝナ」「ゝナル」「ゝノ」などが併存することを知り、それらの用法差の究明を年来の課題としてきた。今、恩師、野地潤家博士還暦の慶事に接し、以下の小論を発表させていただく機に恵まれたことを光栄に存する。

虎明本における漢語の形容動詞的用法については、その研究成果

の一端を発表したことがある。ここでは、終止法及び、連体法のうち、「ゝナ」「ゝナル」併存のものに限って詳述した。本稿では、更に、「ゝナ」「ゝナル」のほか、「ゝノ」形併存のものについて論述するものとする。

一 連体形諸態の概観

形容動詞連体形の「ゝナ」と「ゝノ」とに関して、夙に土井洋一氏は、「ことはの『ゆれ』」と題するご論文において、次のように述べていられる。

活用形内部での「ゆれ」は、形容詞・形容動詞においても、連体形に認められる。すなわち、形容詞の連体形に「な」、形容動詞の連体形に「の」を用いるもので、

暖かい部屋・暖かなー

当然な処置・当然のー

などが共存する。ただし、この現象は、特定の語に限られているから、childish error に見られる「きれいかった」のごとき形容詞・形容動詞一般の問題である以前に、その語の品詞性に因する問題として考えられなければならない。（講座現代語6

「口語文法の問題点」p 274—275 昭39・1 明治書院）

右では、「特定の語に限られている」という点に、まず注目しておきたい。同書には、島田勇雄氏のご記述「連体詞」の項もあり、「くナ」と「くノ」との両形を有する例として、

恰好な(の)・大概な(の)・尋常な(の)・不覚な(の)
 が掲げられている。

また、桜井光昭氏は、「名譽の」と「名譽な」と題するご論文において、

特殊な表現価値を持つ「の」
 慣用的な「の」

単純に比較すべきではない場合
 下に形式名詞が来る場合

一方が個人的傾向と認められる場合
 両方とも一般的と認められる場合

品詞の問題など
 の各項のもとに、実例及び用法上の特徴に関する記述が見られる。

(口語文法講座3「ゆれている文法」所収 p 34—44 昭39・11
 明治書院)

右はいずれも、現代語についての考察であるが、実例の大部分は漢語である。

桜井氏には、古典語に関するご論文もあり(今昔物語集の漢語形容動詞)、ここでは、

「語幹十ノ」と連体修飾の連体形の大きな差異は、後者が主語や連用修飾語を受けることによるものである。しかし、連用修飾

を受けうる例は「語幹十ノ」にも散見される。(早稲田大学教

育学部「學術研究—人文・社会・自然—」第十一号 p 106
 として、

極テ非道ノ事也 5の9
 ほかの例をあげていられる。さらに、

また、連体修飾語になる場合、「くなる」の形よりも「くの」の形の方が多く現われる語が自立し、その傾向は語によってさまざまである。(同右 p 109)

とも述べていられる。

虎明本の「くナ」と「くノ」とに関しては、土井氏の言われる「特定の語に限られている」ものと、桜井氏の言われる「その傾向は語によってさまざまである」ものとが認められる。

1 「くナ」一形のもの

| | | | | | | |
|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 一興 | 異 | 有興 | 臆病 | 稀代 | 軽忽 | 仰山 |
| 御器用 | 綺麗 | 愚痴 | 愚鈍 | 過分 | 果敢 | 緩怠 |
| 懸隔 | 慳貪 | 才覚 | 自墮落 | 慈悲 | 正直 | 冗談 |
| 若輩 | 自由 | 初心 | 進退 | 笑止 | 粗忽 | 粗相 |
| 卒爾 | 大切 | 大胆 | 胴欲 | 比興 | 不案内 | 不覚 |
| 分限 | 不祥 | 不請 | 不精 | 不自山 | 不足 | 不調法 |
| 不敵 | 不念 | 不用心 | 無理 | 勿怪 | 律氣 | 利発 |
| 理不尽 | 横着 | | | | | |

以上、51語である。右には、現代にも通用している語義・用法のものも少なくない。

2 「ナル」一形のもの

| | | | | | | |
|----|----|---|----|----|---|----|
| 尋常 | 達者 | 貧 | 不孝 | 不弁 | 妙 | 違例 |
|----|----|---|----|----|---|----|

右は、「しナ」に比べてごく少数である。「しノ」は、右よりやや多い。

3 「しノ」一形のもの

大果報 軽薄 現 言語道断 散々 上々
正真 少々 大剛 大体 難儀 柔和 秘蔵
富貴 本 毎度 万能 無常 名譽

以下は、連体形に二形以上が併存するものである。

4 「しナ」と「しナル」が併存するもの

有徳 奇特 結構 殊勝 重法 調法 鈍
不審 無道 物狂 利根 聊爾

以上、11語を数えるにすぎない。右の「しナ」と「しナル」とには、凡そ、左の如き相違点が見出される。(旧稿の結語を引用する。)

「しナ」は、通常の(口語の)対話文中に自在に使用されている。待遇表現法上から言えば、幅広い待遇品位を有するが、「しナル」に比べると品位は下がる。

「しナル」は、文語的な性格を保つと共に、その古態性に基く、語り物的文体、鄭重な物言いとして用いられている。

〔大藏流狂言虎明本における漢語形容動詞の用法―終止法・連体法に關して―〕 広島大学教育学部紀要第二部26

昭32)

5 「しナ」と「しノ」とが併存するもの

用

6 「しナル」と「しノ」とが併存するもの

別 余

7 「しナ」「しナル」「しノ」の三者が併存するもの
不思議 推参

以上の5語である。異語数としては僅少であるが、必ずしも用例数は少なくない。なお、5・6に属する語詞が、いわゆる一字漢語であるのは、偶然のことなのかどうなのか。

以下、5・7の三項につき、実例を掲げつつ、考察を進めるものとする。

二 「しナ」と「しノ」と

本項に属するものが、「用」の1語であることは、既に述べたとおりである。

まず、「しナ」の例を掲げる。

○「ようこそおじやつたれ、ない／＼さやうであらふと思ふたれ

ども、今日むこ入めさるゝとはしらなんだに、何事なり共よう
な事があらはおしやれきかう、(教え手↓掣 引敷掣 一570)

「教え手」と「掣」との間柄は、ごく親しい、いわゆる「等閑ない」ものであり、前者がやや上位に立つ。(虎明本一般でのこと)「おじ

やる」「おしやる」などの言葉遣は、親しい間柄での、やや丁寧な言葉と受けとるべきものようである。

次は、「しノ」の例である。

○「いかにむこ殿へ申、これがわれらのひさうのむすみにて有、

かやうにむこにとるからは、此家やしきさいほう、家に付たる
ひくわんまで、只今かた／＼へわたしおくほどに、中をようし

御ざあれ、又ようの事あらはいかやうの事をもうけたまわらふ

するぞや、(男↓舞 賽の日 二62)

舞入り(結婚後、はじめて舞が男の家を訪問する儀式は、舞・男ともに嚴肅にとり行われ、男は舞を鄭重にもてなすのが舞狂言の一般である。「いかに申」にて有「家に付たる」「かた〜」「御ざあれ」「うけたわらふするぞや」などの言葉遣がそのことを証するものである。前例がくだけた表現文と呼ぶならば、後例は、ごく改まった表現文と呼ぶことができよう。僅かな用例数から結論を導くことは危険であるが、前例で「〜ナ」が用いられ、後例で「〜ノ」が用いられているという事実はそれとして注目してよからう。なお、前例が「何事なりとも…事があらは」とあり、後例が「又…事あらは」とあって、文構造上からは大差ないものと見られる。

三 「〜ナル」と「〜ノ」と

本項に属するものには、「別」と「余」との2語が認められる。

まず、「別」について見る。「〜ナル」が20例余、「〜ノ」が40例弱見られる。両形とも、相当の勢力で拮抗していると言えよう。表面では、「べちなる」「別なる」「べち成」「別成」の四様があるが、後二者とも、「べちなる」に等しいものと見ておく。

「別なる」の三、四の例を掲げる。

○／されは此間はおめにかからなんだ、是へまいるも別なる事ではありなひ、おききやつたか、養老の漣と申て、薬の水が出て、
……………(孫甲↓乙 薬水 一四)

右は、同輩間でのものであり、
○／先お礼申、別なる事では御さなひ、(牛博勞↓目代 牛馬 一

170)

は、目下から目上に対するものであり、

○／汝よび出す事べちなる事では、(果報者↓太郎冠者 栗田

口 一35)

は、目上から目下に対するものである。また、男から女への、

○／ようこそわせたれ、もつともみぎにさやうにいふた程に、それは身がうけとれ共、去ながら又よそへいたといふても、べちなる事も有まひ程に、いつもの事なれ共、かにんさしめ、
(仲人↓女、石神 二42)

の例や、女から男への、

○／何事を汝はいふぞ、別成事ではござらぬ、(女↓目代 連

尺 二66)

の例もある。また、曲柄においても、脇狂言・大名狂言・女狂言など多岐に亘っており、身分・性別・年層・曲柄等に関して、顕著な偏りは認められない。ただ、「〜ナル」には、共通する特徴が認められる。左にそれらを列挙する。

ア ほとんどの例が、形式体言「コト」に続く。

例外は、左の1例のみ。

○／いやべちなる用もなひ、(主↓太郎冠者 拔殻 二89)

次の、

○／先お礼申、べちなる申事でも御さなひ、(浅鍋売↓目代 鍋

八撥 一四)

は、両者の中間的用法とすべきものであろうか。

イ 打消の表現文を作る。「ない」「あるまい」「おりない」「い

「別なる」(「いかなる」)

右には、例外がない。

ウ ア・イとも関連するが、「べちなる」を含む一文全体が、類型的な文構造(慣用文)となっている。(既掲の実例参照)

エ 相手の問いかけに対して、また、単に改まって話を切り出す時の表現文として用いられている。(ウと密接に関連する。)

○/いさかひて、せんどのおぎさうこうに、さごと何やらんめを引、さくやきした、べち成事ではあるまひなど云て、……………

(妻↓右近 卜書 右近左近 二 388)

は、エの例外となる。但し、卜書中のものゆえ、確例とはなしがたしい。

ともあれ、第一節で引用した、「くナ」「くナル」併存例の場合とは異なり、「別なる」には、文語性や格別の上品さは認めがたいように思われる。ただ、改まって用件などを切り出す言葉遣という点に共通した特徴を見出しうるのではないか。

次に、「別の」を見る。

「別の」が、同輩間でも用いられ、目上から目下へ、目下から目上へにも用いられる点、「別なる」の場合に等しい。男から女への例も、いくらか見出される。

○/それにつけて申まらする、只今これへつれて参るも別の事で
も御ざらぬ、(兄↓お察 比丘貞 二 511)

は、その一例である。(女から男への例が見えないのは、恐らく偶然のことであろう。)

諸他の用法に關しても、「別なる」に通うものが少なくない。「別

なる」と比照しつつ、「別の」の特徴を左に列挙する。

ア 形式体言「コト」に続く例が多数を占める点、「別なる」の場合に等しいが、「別なる」の場合に比べて例外が多い。

○ 其上わたくしは、べちのどがもごさなひほどに、なんぞせうぶを仰付られて、其かちまけによつて、わたくしがまけたらば、いかやうにもこしめせ、(為朝↓親鬼 首引 二 62)

の、「とが(科)」に続く例のほか、「子細」(文荷二 199 はが全4例)に続く例。

○/あの出家とひと所にいとふもなひ程に、別の間があらは、かしておくりやれ、(法華僧↓亭主 宗論 二 111)

と、「間」に続く例が4例(いずれも「宗論」中に認められる。)と、用語に偏りが認められる。「別なる」の場合よりも、承接上の緩やかさが認められるものの、やはり、特定の用法を有するものとされよう。

イ 多く打消の表現文を作るといふ点でも、「別なる」に近似する。下接語が、「コト」の場合はもとより、「子細」の場合も同様である。但し、左例の如く、「名」に続く場合は、依願の表現文となっている。

○/いやくそれはわるふ御ざらふ程に、別の名を付てくだされ
ひ、(男↓出家 路連 二 651)

先述の「間」に続く場合も、打消の表現文となるのが普通であるが、左は、その例外となる。

○/べちの間がおりなひか、(法華僧↓亭主 宗論 二 111)
と、問いかけの表現文となっている。「おりなひ」と否定語をとつ

ている点では、他と変りがない。) 下接語の場合と同様、表現法に
関しても、「別なる」よりもやや広いと見るべきものようである。

ウ 類型的表現という点に関しては、「別なる」に通うものも少
なくないが、次のような顕著な相違が認められる。

○／なんぢよび出す事べちなる事でもなひ、(主↓太郎冠者 止動

方角 二113)

右には、人代名詞「なんぢ」が文頭に立ち、「よび出事」が主部に
立っている。同類型の例は、10余例に及ぶ。それに対して、「別な
る」の場合は、僅か2例にすぎない。左に、その一例を掲げる。

○／汝よび出す事べちなる事でもなひ、(果報者↓太郎 栗田口

一 335)

「べちなる」の2例は、いずれも、主人から従者に対して用いられ
ているが、「別の」は、

○／そなたをよびいだす事別の事でもおりなひ、(右近↓妻 右

近左近 二333)

の如く、夫から妻に対する例も、いくらか見られる。

エ 相手の問いかけに対して、また、単に改まって話を切り出す
時の表現文として用いられることが多いのは、「別なる」の場
合に等しい。(既述の、「間」に続く場合は例外。)

以上から、「別なる」と「別の」とは、多くの共通点を持ちなが
らも、小異のあることを明らかにし得たと思う。

次に、「余」の例を見る。

「余なる」の例は、僅か2例にすぎない。一例を左に掲げる。

○／汝よび出す事よなる事でもなひ、(大名↓太郎冠者 萩大名

一114)

多くの点で、先述の「べちなる」の用法に合致する。

「余の」は、凡そ30例が認められる。「余なる」が2例とも「コ
ト」に続くのに対して、「余の」の場合は多形である。

者：7例 義：5例 人・事：各4例 物・所：各3例

鳥：2例 女・着：各1例

殊に、「者・人」「義」「物」「所」などに続く点で、「別の」に比べて、
一段と用法の広いことが知られる。「者」に続く一例を左に掲げる。

○ わたくしは不案内に御さる程に、よの者をやらせられい、
(太郎冠者↓果報者 張蛸 一98)

以下、挙例を省略し、「別」と対比しつつ、まとめを述べるもの
とする。

まず、「余なる」については、「コト」に続く点で「別なる」に
等しく、「汝よび出す事」式の言い方を承ける点で「別の」に近い。
また、改まりの表現という点では、「別なる」「別の」に通う。

次に「余の」については、多種の語に続く(既述)というほかに、
「義」の語に続く場合を除いて、打消の表現文となることが稀であ
る。「鳥」に続く一例を掲げるならば、

○／同じ鳥が、またよの鳥を取よな(閻魔主↓政頼 政頼 二144)

の如くである。

「義」に続く場合は、すべて、打消の表現となっている。左に、
その一例を掲げる。

○／是は洛中にすまひする者にて候、たゞ今是へ出る事よのきに
あらず、(男 独白 髭樞 二117)

また「別なる」などに多く見られた、

○「汝よび出事」式の言い方か、先例の「たゞ今是へ出る事」式の言い方かの、二様が認められるにすぎない。(「類型的で、改まりの表現」かくして、「余の儀」とある場合に限って、「別なる」「別の」「余なる」と相近いものであることがわかる。一方、「余なる」と「余の」との相違点は、「余の儀」ある場合の述部が、「余なる」とあるものが3例(先掲、「髭櫛」の例参照)、「余の儀」とあるものが2例で、「余なる」では、「ない」「ござない」とある点である。「余の」の方が、一般と文語的もしくは改まった表現であると見えよう。

四 「ゝナ」「ナル」と「ノ」と

これには、「推参」「不思議」の2語が認められる。いずれも用例は少ない。

「推参な」は、次の二つの類型に分かれる。

a 「推参なやつめじや。」式の言い方

○「いやそなたはしづかにおまいれ、おのれはいせのねぎと見えた、すいさんなやつじや、かけでの山伏には、じぎが有、おりおれ、(山伏↓祿宜 祿宜山伏 一〇〇)

b 「推参な事を言ふ。」式の言い方

○「やいおのれはすいさんな事をいふ、身共にむいてそのつれな事をいはずきまひがな、(勾頭↓伯菴 伯菴 二〇二)

いずれも罵りの表現で、目上から目下に対する例ばかりである。な

まなましい、それだけに、話しことばとしての面目躍如たるものがある。「推参なる」は、左の一例を見出すのみである。

○「是は言語道断もつたいなきお言葉かな、すいさんなる申事なれども、今よりしてうるさしと申事仰られな、ぶつきやうなることばにて候、(藤三↓女 右流左止 二四四)

右には、「候」言葉が用いられている。本曲は、名告り及びそれに続く独白の場面と、「うるさし」の謂れを語る「語り」の場面とに限って、「候」言葉が用いられている。右例は、語りの直前にある表現である。更にその少し前の表現文では、同じ藤三が女に向かつて、

○ことにうるさしと云事は、ぶつきやうな事じや程に、今よりしてな仰られそ、(二四四)

と、「ぶつきやうな」を用い、先の「ぶつきやうなる」に対立している。「すいさんなる」「ぶつきやうなる」「候」の三者は、互いに連れ添うべくして連れ添った用語とせられよう。(この点については、旧稿でやや詳しく述べた。)

「推参の」は、左の一例のみである。

○「なにと、すいさんのおうちめや、く、(祖父↓孫 枕物 狂 二四二)

フシがかりの中での用語である。後に述べる「不思議の」の場合もまた同様である。「ノ」の特定のなるものであることは、ここに明らかである。

「不思議な」は、いずれも「事」に続いている。その点に限って言えば、既述「推参な」のb型に属するものともせられよう。「ノ」

ナ」が「事」に続く例の多いことは、旧稿で指摘した。一例を左に掲げておく。

○是はいかな事、さて^レ今のはふしぎな事じや、(盗人 独言 瓜盗人 三71)

「不思議なる」は3例あり、うち2例が名告りに続く独白の場面(しかも1例は、候文体)に用いられている。その一例は、

○是は此あたりにすまゐる者でござる、去程に此間ふしぎな引事がござる、(男 独白 葺 一70)

とある。残る一例は、

○それへ参らうずると存る所に、御出しうちやく申て候、われらもふしぎなる御むさうの有、(男甲↓乙 毗沙門 一31)

の如く、候体の文脈中のものである。「推参なる」にほぼ等しいものとする事ができる。

「不思議の」は、左の二例を見出すことができた。

○イロシ^レ爰にふしぎのおとこ一人あり、其名をあん太郎と申、則げらが事なり、(男 吃 二33)

○是はふしぎの御事かな、(出家↓菜阿祢 菜阿祢 二74)

既に「推参の」で触れたとおり、フシガカリの特定の用法と見るべきものであろう。

以上に見てきた「^レノ」形には、前部に連用修飾部や連体修飾部をとる例が見当らず、その面から形容動詞か否かを判別することは困難であるが、「推参な」「不思議なる」を形容動詞と認めようとする立場からすれば、右の「推参の」「不思議の」を形容動詞と見ること、大きな矛盾はあるまいと考える。

むすび

以上を通して思うことは、初めに引用した土井洋一氏の、(両形が併存するのは)特定の語に限られている。

というご指摘を首肯すると同時に、

併存する場合、各々に用法差が認められ、しかも、「^レナ」には「^レナ」「^レナル」には「^レナル」に通じて共通性が認められる場合もありはするが、語詞ごとに事情の異なることもあるということをご指摘しておきたい。

ところで、桜井氏が、今昔物語集の調査結果に基き、

連体修飾語になる場合、「^レなる」の形よりも「^レの」の形の方が多く現われる語が目立ち、(略)

と指摘されたことと、虎明本の「漢語^ノ」が特定のであることは、関連する事柄なのかどうか。まずは、院政鎌倉時代の文献について精査することが、緊要の課題となるであろう。

なお、筆者は、次の課題として、和語形容動詞の連体形の用法について検討を試みたいと考えている。

純形容動詞と見られるものは、左の24語である。

- 1 「^レナ」一形のもの(「大きな」ほか22語)
 - 2 「^レナル」一形のもの(「あまさかさまなる」ほか5語)
 - 3 「^レノ」一形のもの(「あま(天)」の「ほか29語」)
 - 4 「^レナ」「^レナル」併存のもの(4語)
 - 5 「^レナ」「^レノ」併存のもの(1語)
- あはれ あらた すぐ(直) みごと

さいはひ

右のほか、準形容動詞を含めると、かなりの語彙にのぼる。更に、これら準形容動詞の中には、いくらか興味深い用法を見せるものがある。純形容動詞・準形容動詞についての総合的考究は、次の機会に俟ちたいと思う。

補記

旧稿において、「ゝナ」「ゝナル」「ゝノ」三者併存の例として保留しておいた「奇特」の一語はその後の検討によつて、「ゝナ」「ゝナル」併存の例として処理すべきことに気づいた。左に、一、二例の用例を掲げて、修正に努めたい。

「ゝナ」の一例は、

○あまりきどくなかひてじやほどに、みやげをしんでう、(売手)
↓太郎冠者 末広がり 一84)

の如くである。凡そ30例を見出し得た。うち20余例が「コト」に続いている。

また、「奇特なる」の一例は、

○誠にきどくなる事でごさる、よの常のすまふの手あひにかわつて、袖をひろげて、とぶやうにいたいたが、ふ審にごさる、

(太郎冠者↓大名 蚊相撲 一三)

である。他3例が、名告り直後の独白・語り・候文体中の例であるのに対して、右1例のみが例外となる。この一曲全体の言葉遣について検討が必要であると考えられる。

(本学学校教育学部助教授)